

第一次大極殿院広場の調査

—第454次

1 はじめに

第一次大極殿院地区の調査は、1959年の第2次調査より開始し、区画の東半分と回廊部分を中心に継続しておこなってきた。これまでの調査で、奈良時代前半から平安時代初期にかけての大きく3時期の遺構変遷が確認されている。昨年度は、西面回廊の未発掘部分を調査し（『第一次大極殿院回廊の調査 —第431・432・436・437・438次』『紀要2009』）、第一次大極殿院回廊の全貌をあきらかにしたほか、第432次調査では区画内の西南隅部分で性格不明の矩形の段差SX19227を検出した。このSX19227と似た段差を東対称位置である第41次調査でも確認していることから、本年度はこれらの段差の全貌の解明を目的とし、第41次調査区の西側に調査区を設定した。この場所は同時に、第一次大極殿院地区東半で唯一未発掘の部分でもあった。調査面積は約1556㎡（南北54m、東西29.5m）、調査期間は2009年4月13日～7月15日である。

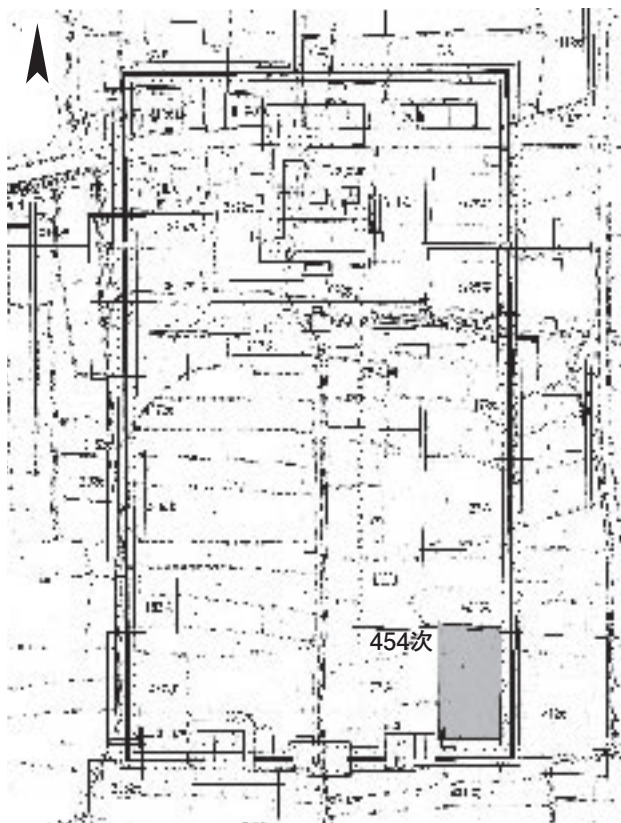


図186 第454次調査区位置図

2 調査地の地形と基本層序

第一次大極殿院地区は、奈良山丘陵の尾根筋に位置し、北から南へなだらかに傾斜する。今回の調査地は、東面回廊と南面回廊に囲まれた広場の東南隅部分にあたり、当地区の南端に位置するが、2002年度に大極殿院復原にともなう整備土が90cm程度積まれており、調査前は北から南へ緩やかに傾斜した平坦な地形であった。

基本層序は地表面より、整備にともなう盛土、旧地表面、旧耕作土、旧床土、上層礫敷層、中層礫敷層、下層礫敷層、整地土、地山の順である。遺構は、旧床土を取り除いた面で検出し、一部上層礫敷をはずして中層礫敷および下層礫敷を検出した。

3 検出遺構

検出した遺構は平城宮造営前・奈良時代前半・奈良時代後半に区分される。第一次大極殿院地区の時期区分は『平城報告Ⅺ』に示されており、本報告もこれに倣う。

平城宮造営前の遺構

地山上で、溝3条（SD19316～19318）、小穴3基（SK19321～19323）を確認した。SD19317・19318は幅20～30cmの斜行溝で、両者は2.2mの間隔で平行するため、一連の遺構とみられる。

I-1期

平城宮造営当初の遺構である。

広場SH6603A 大極殿院内庭の礫敷広場。広場部分で確認されている3層の礫敷のうち、もっとも下層の遺構である（下層礫敷）。地山上に厚さ20～30cmの整地を施し、その上に径3～10cmの礫を敷き詰め舗装とする。検出した礫敷面の標高は、調査区北端で68.1m、南端で67.75mで、北から南に緩やかに傾斜する。

足場穴SS3795 大極殿院東面回廊の足場穴。第41次調査で検出した遺構であるが、今回南端で新たに2基検出した。径40cm程度の小穴がほぼ等間隔に並び、一部は重複し、2時期あることを示す。回廊の造営および解体に対応するとみられるが、削平により礫敷面が失われているため礫敷舗装との関係は不明である。

I-2期

南面回廊に東西楼閣を増築し、広場に中層礫敷を敷設する時期である。

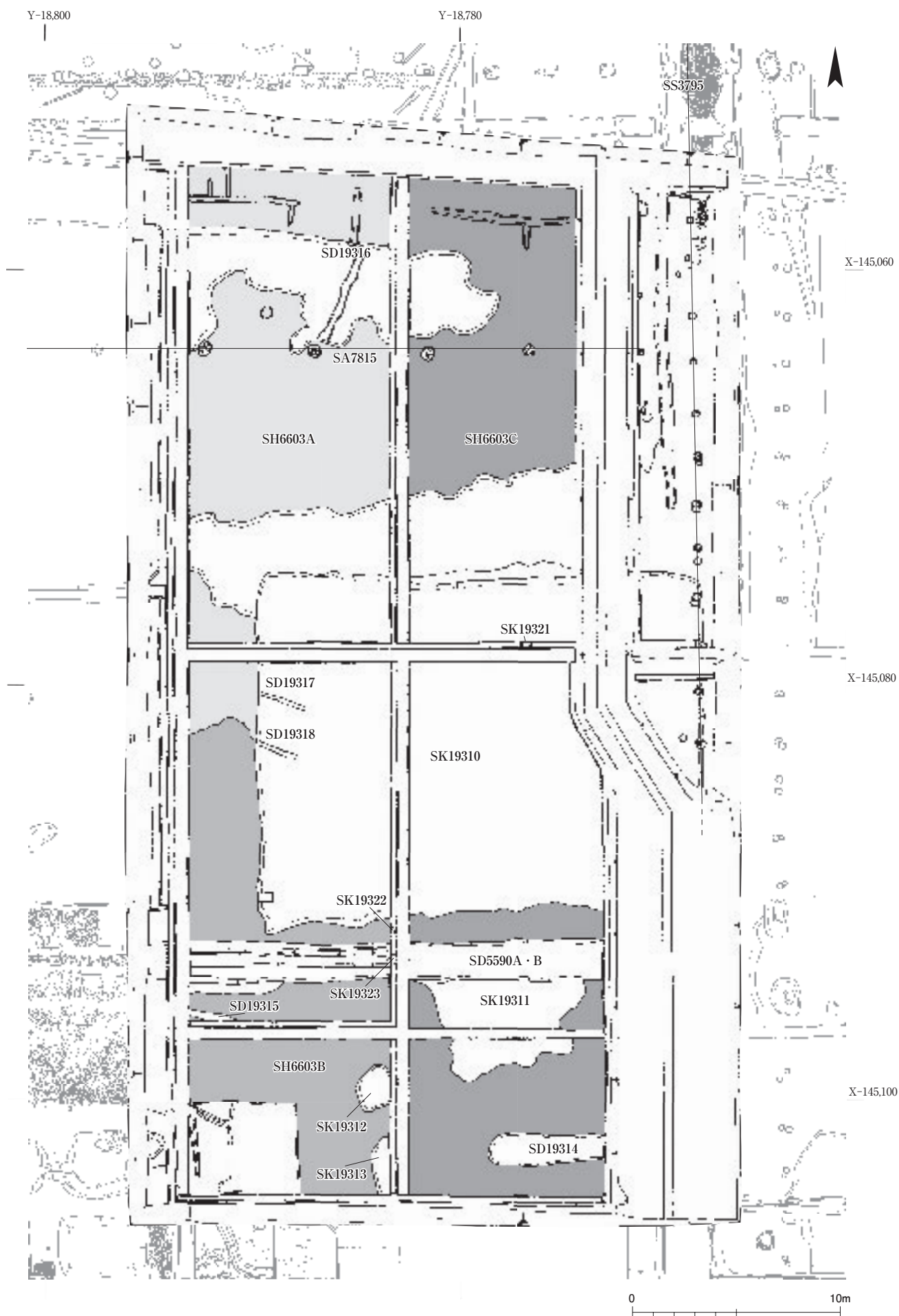


図187 第454次調査遺構平面図 1:250

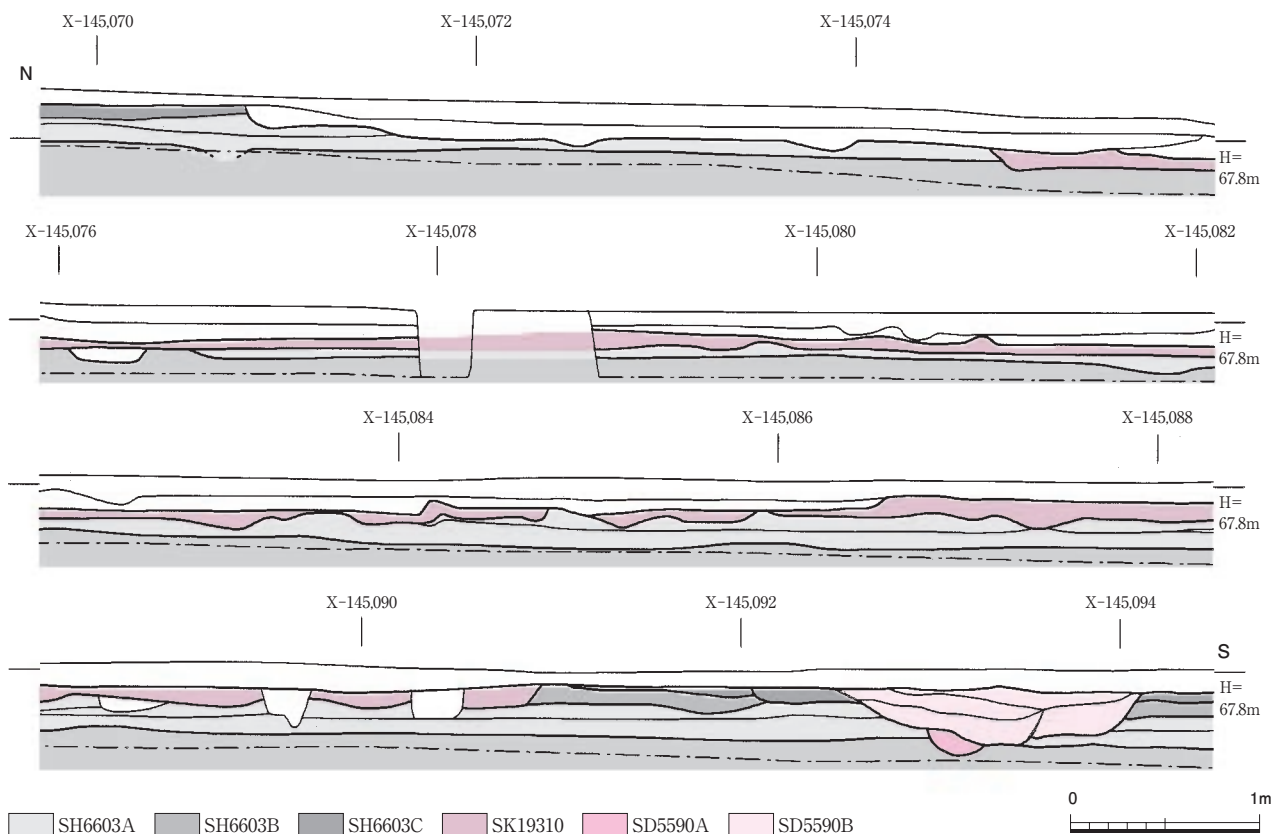


図188 調査区中央畔西壁断面図 1:40

広場SH6603B 下層礫敷の上面に新たに土を積み、その上に径5～15cm程度の石を敷く（中層礫敷）。礫を確認したのは南面回廊北雨落溝から北に27mまでの範囲で、それより北側にはおよばない。礫敷面の標高は、調査区西辺の南端で67.8m、後述のSD5590南岸で67.65mとなり、緩やかではあるが傾斜が南から北へと造りかえられていることがわかる。また、X-145,096ラインで西端の標

高は67.75m、東端は67.65mとなり、地表面が東楼から東に向かって下がっている。これは、それまで北から流れてくる排水を南面回廊北雨落溝で受けていたものを、東楼の増築にともない傾斜を変え、後述するSD5590に集めるように計画されたためであろう。

東西溝SD5590A 調査区南部で検出した素掘りの東西溝。幅2m程度、深さ15cm。西は第77次調査、東は第41次調査で延長部分を検出している。南面回廊北端から北に16mの位置で広場を横断し、東端は東面回廊西雨落溝に合流する。2時期（A・B）あり、それぞれSH6603BとSH6603Cに対応する。

東西溝SD19315 中層礫敷面で検出した東西溝。幅40cm、深さ10cm。埋土は褐色シルト。

I-4期

広場に上層礫敷を敷設する時期である。

広場SH6603C 下層礫敷および中層礫敷の上面に砂を撒き、その上に径1～2cm程度の礫を敷く（上層礫敷）。本調査区内では回廊部分以外のほぼ全域で確認した。

東西溝SD5590B 上層礫敷敷設後に同位置に掘り直された素掘りの東西溝。一部で直径15cm程度の石が底に並ぶため、本来は石で護岸していた可能性もあるが、石の残存量は非常に少ない。埋土は何回かの掘り直しが見られ、大極殿院回廊所用の瓦が多数含まれていることから、大極殿院廃絶時に埋められたことがわかる。

土坑SK19311・19312・19313 SD5590Bの南側で検出し



図189 SH6603B検出状況（南東から）

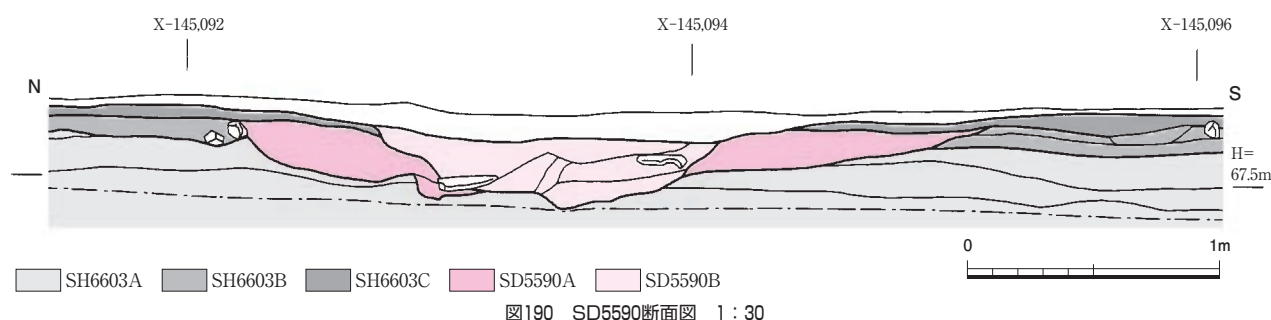


図190 SD5590断面図 1:30

た上層礫敷面より掘り込む不整形の土坑。深さは40cm弱で、下から褐灰色シルト、明褐色粗砂、褐灰色粗砂、黄褐色粗砂の順で丁寧に埋められている。もっとも上層の黄褐色粗砂からは回廊所用の軒瓦が出土しており、大極殿院廃絶時に埋められたと考えられる。

東西溝SD19314 調査区東南隅で検出した東西溝。幅約1.4m、深さ40cm。埋土に回廊所用の軒瓦が含まれており、SK19311など同時期の遺構である。

Ⅱ期以降

大極殿院廃絶以後の遺構である。

東西堀SA7815 調査区北側で検出した広場を横断する東西堀。第77次調査で検出した東西堀の東延長部分にあたる。今回新たに柱穴4基を検出し、また第41次調査で検出した小穴1基もこの堀の一部であることを確認した。柱穴の径は約60cm、柱間間隔は4.5～5.4mとまばらである。埋土には瓦や磚が詰まる。柱穴が小ぶりで柱間間隔も広いため、仮設の堀などであろう。

土坑SK19310 調査区中央で検出した方形の土坑。東西約22m、南北約17m、深さ約20cmの浅い落ち込みで、底面はほぼ平坦である。埋土には礫敷由来の礫と砂が混じるが、水が溜まったような痕跡はない。埋土を覆う灰色粘質土からは瓦器が出土するが、埋土自体からは遺構の年代を示す遺物は確認されなかった。(大林 潤)



図191 SD5590検出状況(西から)

4 出土遺物

金属製品 錢貨1点のみである。SK19310直上から、軋元重宝(唐錢、758年初鑄)が1点出土した(図192)。外縁外径平均24.35mm。重さ2.7g。(芝康次郎)

瓦磚類 表12の軒丸瓦6284、6304、軒平瓦6664、6668は第一次大極殿院の回廊および東樓の創建瓦である。隅木蓋瓦はSD5590Bから出土した(図193)。小口面の文様は花雲文で中心飾りのみが残る。瓦上面には稜線が通る。この文様は第一次大極殿院東樓(第77次調査)から出土した隅木蓋瓦と同范である。本調査出土品も東樓所用であろう。(今井晃樹)

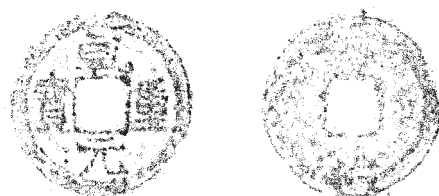


図192 軋元重宝 1:1

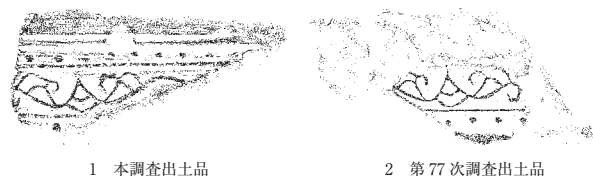


図193 隅木蓋瓦 1:4

表12 第454次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6284	C	4	6664	C	20	面戸瓦	2	
	D	2		K	1	隅木蓋瓦	1	
	Ea	1		?	7	両面タタキ平瓦	1	
	?	3		A	1			
6304	C	1	6668	A	7			
	型式不明	15		A	2			
				葉 321	1			
				型式不明	7			
軒丸瓦計		26	軒平瓦計		46	道具瓦計		4
丸瓦			平瓦			磚	凝灰岩	
重量	61.548kg		315.991kg		5.420kg		0.117kg	
点数	912		7925		6		4	

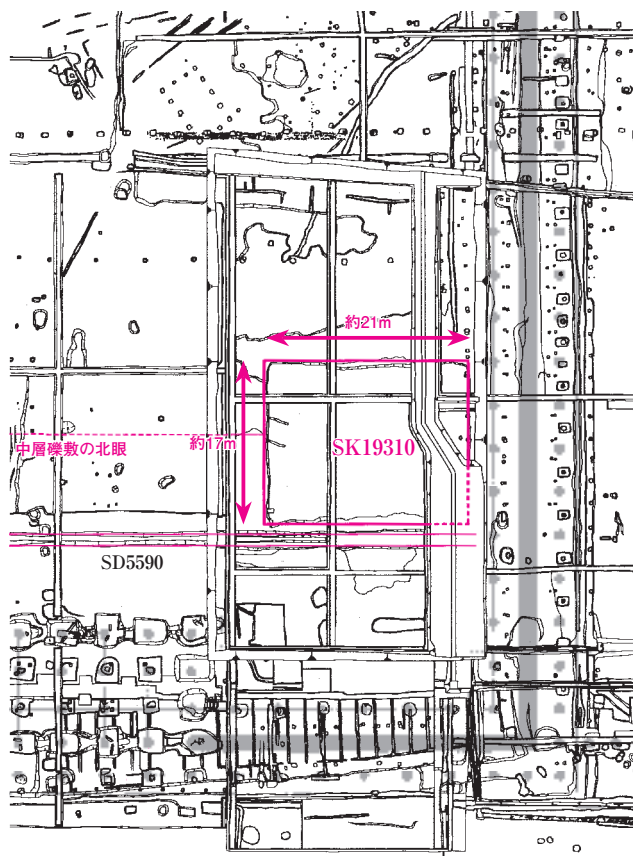
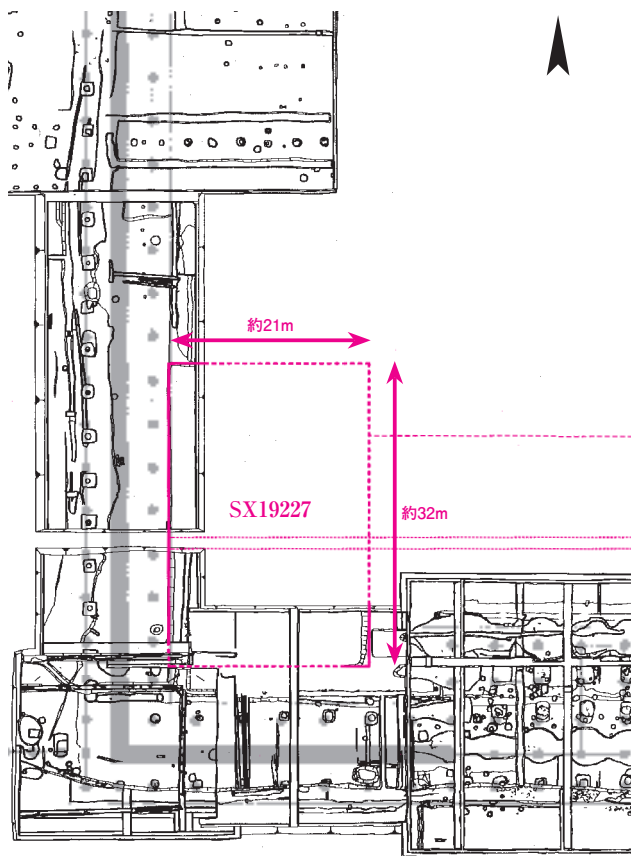


図194 SK19310とSX19227の位置関係 (右：東南隅部分・左：西南隅部分) 1 : 800

5 まとめ

今回の調査で判明した点は以下のとおりである。

まず、奈良時代前半の大極殿院内庭広場の変遷を確認した。なかでも、Ⅰ－Ⅱ期の内庭広場の改変と、中層磔敷の範囲をあきらかにしたことは大きな成果である。平城宮造営当初は、内庭広場の排水は南面回廊北雨落溝が受けて東西に流し、東南および西南隅部分の暗渠を通り回廊の外に排出していた。その後、南門の東西に楼閣を増築すると、南門から回廊隅部分までの南面回廊北雨落溝が東西楼によって分断されることになり、排水路が機能しなくなる。そこで、楼閣周辺に盛土し地面の傾斜を変え、南面回廊北雨落溝より約16m北に東西溝SD5590を設け、内庭広場の排水をこのSD5590で受けるように計画を変更していたことを確認した。この盛土の範囲に撒かれた礫が中層磔敷であり、今回はじめてその北限を確認し、内庭広場全面には敷かれていないことがあきらかとなった。

次に、方形土坑SK19310であるが、その規模はあきら

かにしたもの、遺構の時期は特定できなかった。西側の対称位置(第432次)で確認したSX19227は、第360次で検出している段差がこの遺構の東南隅部分であるとなると、南北32m、東西21mとなり、SD5590を掘り込む南北に長い矩形の土坑であると考えられる。深さは約20cmである。いっぽう今回検出したSK19310は、SD5590の北で閉じ南北幅は約17mとSX19227に比べて小さく、東西対称ではないことがあきらかになった。しかし規模は異なるものの、中軸に対してほぼ同じ位置に同じような形状の土坑があるということは、何らかの機能を有していた可能性が高い。埋土には長期間水が溜まったような様子はなく、水溜めのような機能は考えられないが、区画内でもっとも水の集まる場所であることから、たとえば大雨でSD5590が氾濫し地面の緩んだところを、土を入れ直して固めるといった、土地改良のようなものの痕跡とも考えられる。

今後、平城宮内や他の官衙・宮殿などでこのような事例が確認され、具体的な性格が解明されることが望まれる。

(大林)